



巻頭言

大阪IIゾントクラブ会長 丸山 優子



—最近のゾンタについておもう事—

大阪IIゾントクラブの会長に就任してもう6ヶ月を過ぎようとしているのに、私はなにもクラブの皆さんのお役にたっていないばかりでなく、少し、現在のゾントクラブの在りかたに疑問をもち、活動方針もみえてこないことに苛立ちを感じています。奉仕活動は強制されて行うものでなく、自発的に自らするものであると考えております。私にとっての奉仕活動は自分の仕事に専念し、少し時間に余裕が見つかったときに何かお役に立てる事が出来ればと考えて入会しました。奉仕活動に専念する決心で会長のお役を引き受けましたが、現実には異なり奉仕活動以外の雑事が多く、クラブの皆様にご迷惑をかけ申し訳なく思います。今大会の準備期間が極端に短かった為にも拘わらず、一生懸命に多くの犠牲を払い準備して頂いた多くのゾンシャンの方々に誠に申し訳なく思いますが、この度の地区大会に参加してみて、分割、値上げ、役

員選挙のみに議論が集中し、各人の思惑が先行し純粋な奉仕の精神をもったゾンシャンにとって期待外れで、奉仕団体の意義のある会議であったのか疑問に思いました。大切な仕事の時間、費用を犠牲にしてまで参加した意義はなかったのではないかと思った人は私一人ではないと思います。こんな事を書けばお叱りを受けますが、何とか誠実で正直な本来のゾントクラブの姿に戻し、皆で仲良くお互い信頼し助け合い奉仕活動が出来るように頑張りたく思っています。これからこのクラブ所属していることに誇りを持ち沢山の仲間入会を進められるクラブになるよう皆様と努力したくおもいますので御協力お願い申し上げます。次の会報がでる頃には胸をはって私は奉仕活動の結果を報告できるように頑張ります。





本年5月、ガバナーより1年任期の奉仕委員長の打診があり、勉強をしてみたいという気持ちを押し難くお引き受けしました。言うまでもなく、ゾンタ活動の根幹は奉仕活動にあります。地区大会の報告のため、2000年度の26地区の奉仕活動を調べ、論文をまとめる作業をするなかで、判ってきた事を書いてみたいと思います。

2000年度26地区奉仕活動の総額は、73万US\$（8800万円）でした。そのうち国際奉仕活動の総額は、全体の35%、国内奉仕の総額は、全体の65%と、国内奉仕に重点を置いているのが判ります。

1. 国際ゾンタ基金

26地区より国際ゾンタ基金への寄付総額は、17万US\$（2000万円）で、内訳は各クラブよりの寄付が61%、個人寄付が28%、26地区よりの寄付が11%です。周知の如く、国際ゾンタはユニセフやユニフェムと協力して、女性や子供を守るための事業を行い、業績をあげています。ネパールでは、破傷風のワクチン接種を行って新生児死亡率の減少に成果を挙げていますが、これは、我々の寄付金で賄われています。またブルギナファッソでの女子割礼の禁止、インドの女性を暴力から守る取り組みも成功し大きな成果を挙げています。

2. 国際奉仕活動（国際ゾンタ基金以外）

総額8万US\$（1000万円）のうち、今年度、特記すべきはインド大地震に対する、義援金です。その他、モンゴルの寒冷被害、洪水、地震などのお見舞い、砂漠の緑化運動支援、結核等の疾病からの予防、治療支援、フォスターペアレントプランなどの多岐に亘ってます。

3. 国内奉仕活動

総額は、48万US\$（5800万円）で、各クラブが積極的に取り組んで立派な成果を挙げておられるのには、心より敬意を表します。奉仕先の大まかな傾向を述べます。

①奨学金（国内奉仕の22%）

対象：外国人留学生、貧困家庭、障害児童や学生等

②社会福祉関係（35%）

*高齢者福祉施設、精神障害者施設、盲学校、聴力障害者施設、孤児、身体障害者、独居老人などに対する支援。定期的に訪問したり、ヨーグルト等の食べ物を毎日送るなど心の籠った奉仕活動がなされてます。

③盲導犬の育成支援（3%）

④文化教育事業（27%）

*女性や子供のための教育活動（手に職をつける等）お年寄りとの交流会等

⑤その他

*環境汚染防止への取り組み又は支援等

*災害への見舞金と支援（伊豆地震、洪水等）

以上、26地区のゾンシャンは、多方面に亘り、積極的に奉仕活動を展開しており、これは、ゾンタの精神に叶った素晴らしい活動であると高く評価されます。

奉仕活動は決して金銭のみでなされるものではなく、誠意が大切であることは言うまでもありません。本年は、夫や恋人より暴力を受けた女性に対し、各クラブが、財政的のみならず、精神面のケアをされているのが、印象に残りました。今後も国際ゾンタの精神に則り、奉仕活動を続けていこうではありませんか。



2001年 11月1日～3日 大津ピアザ淡海ほか

第6回26地区地区大会会長会議に出席して

徳光 正子



さわやかな秋晴れのもと、美しい自然に包まれた湖畔の琵琶湖ホテルで、メアリー・マギー国際会長とジェーン・オブライエン組織拡大委員長のお二人をお迎えして、クラブ会長の昼食会と会議が行われた。

三宅エリア4ディレクターの司会進行で、今泉敦子ガバナーの明快なご挨拶があり、先ず以前より懸案事項であった地区会計に関する一件は、国際監査法人 (IOC Audit Corporation)により承諾された旨が報告された。長い間、問題とされ議論されてきたが、この承諾を持って終了し、今後は新しく21世紀のゾンタを構築するためにチャレンジをして行きたいとのことであった。

メアリー・マギー国際会長からも、地区大会への激励のご挨拶があり、おいしい仏蘭西料理のコースをいただきながら、なごやかに会が進められた。9月11日の痛ましい米国同時多発テロに対する寄付金は、26地区から、ニューヨークとワシントンのゾンタクラブのガバナー宛に20000 \$送ることになり、会場内にも募金箱が設置されるとの報告があり、又、国際ゾンタへの寄付金は、アジアナイトの時に国際会長にプレゼントするとのことであった。

ビジネスセッションでの会議の進め方については、日本人はロバート法に慣れていないので、新自治法により各地区のスタイルで行うことが可能であると説明があった。

選挙については、白紙は無効と解釈し、役員については、過半数をもって信任をするとのことであった。決まらなければ、郵便投票など何らかの形ですることでも可能なので、むし

ろ時間を決めて、地区がバナーやエリア委員会のあり方を決めてからでもいいということ。(ただしガバナー研修は11月なので、ガバナーについてはそれまでに)しばらく休眠していた私には、ゾンタへのチャネル切り換えが難かしい限りであったが、新しい歩みが始まったという印象を受けた。

それにしても、休けい時間に、ホテルのバルコニーから眺めた静かな琵琶湖の空に輝く月の美しさに溜息がこぼれた。幸せなひとときだった。



ミシガン船上にてグッズ販売

開会式と歓迎晩さん会

川村 くに



国際ゾンタ26地区第6回地区大会が平成13年11月1日から3日まで滋賀県大津市のピアザ淡海で開催された。地区理事会、クラブ会長会議にひきつづいて開会式が行われた。今泉ガバナーの開会宣言についてゾンタオフィシャルソング斉唱。大会委員長の歓迎の言葉があり、国際会長メアリー・マギーさんの基調講演があった。

国際ゾンタは多くの変革に挑戦していかなばならないと感じている。鍵となるのは国際ゾンタが国際財団と協力して作る戦略計画である。その目的はS-M-A-R-TでSpecific Measurable Attainable Result Oriented Time Determinantの頭文字である。今期の国際奉仕プロジェクトの最近の結果は、

- (1) ユニセフと共同でネパールにおける新生児破傷風の予防注射80万人の女性に行われた。
- (2) プルキナファソの7県において女性割礼の66%を無くすことを目的に進んでいる。
- (3) インドにおけるものでは、婦女子暴力防止のため情報の入手、男性との協力体制作り、法律について知識を与える。

の三つの分野を決めた、と国際ゾンタの活動を話された。

開会式にひきつづき歓迎レセプションが琵琶湖汽船ミシガン船上で行われた。すっかり陽の沈んだ湖上に浮かぶミシガンへ、イルミネーションのアーチをくぐり華やかに着かざったゾンシャン達は急いだ。

船上では、ジャズバンド生演奏で迎えられた。船は静かに湖面を走り、美味しいお料理に楽しいおしゃべりに花が咲いた。アルコールも回った頃甲板へ出てみると涼しい風が吹いて、また一入。ここでは武内さん楠本さんがグッズの販売をして下さっていた。少しお手伝してみたが物を売るのは難しいものでした。

大会委員の皆様ホストクラブの皆様には短い期間にここまでよくやって下さった事と心より感謝します。ありがとうございました。





平成13年11月2日 AM9:00~11:30

11月2日(金)午前9時からの第1回「ビジネスミーティング」に出席するため、午前6時起床、家族の朝食用サンドイッチと高校生の息子2人の弁当を作り、午前8時新大阪発の新幹線に飛び乗った。何かと雑用に追われる日々の中、新幹線の車窓から紅葉の始まった景色を見ながら京都まで僅か20分の旅は結構楽しめた。

さて、第1回「ビジネスミーティング」の出席者は約350名、審議事項は、地区分割と地区費改訂(83ドルに値上げ)であった。投票の結果は、予想に反して(?),いずれも否決であった。

私は、地区分割、地区費改訂の必要性について資料を添えた上での十分な説明と証明が尽くされていないと感じていたため、現状では否決は妥当な結論であると思った。また、当日のミーティングでも、時間的制約があったとはいえ、活発な議論が繰り広げられたとは言えず、消化不良のまま投票に進んだという印象を受けた。特に、クラブ数で絶対的優位に立つ日本としては、台湾、韓国の会員の意見をもっと聞くべきであったと思う。

我がクラブでは例会日にバイローズの輪読を続けているが、バイローズにもロバート議事法にも流れている精神は、「fair」(公正)であり、「fair」の前提は、情報公開である。たかがボランティアではあるけれど、無欲の奉仕だからこそ、「fair」は、常に心がけなければならない視点だと思うのです。



アジアナイトに出席して

萩原 謡子



ほんのり紅葉した木々に縁取られ、穏やかに水をたたえた湖を一望する琵琶湖ホテル。その瑠璃の間において11月2日にアジアナイトが開催されました。

た。各クラブから国際会長へ寄付金の贈呈も行われました。

テーブルでは美味しいお料理をいただきながら、国籍を越えてのお話がいつまでも弾んでおりました。

日中催されたビジネスミーティングの緊迫した雰囲気とは打って変わって、皆さんにこやかな笑顔で歓談しており、会場全体がゾンタの大きな輪にすっぽり包みこまれているように感じました。これからも皆仲良くゾンタの連帯の輪を広げて行きたいものです。

早川久仁子大会委員長の開演の言葉、原菊子元ガバナーの挨拶、Amy Lai財団大使による乾杯と続き和やかな会食が始まりました。

R³ TAP-HORICによるタップダンス、TRIANGLEによる演奏、韓国のオペラ歌手の歌で会場が一気に楽しい雰囲気になりまし



大阪Ⅱゾンタクラブ代表として寄付を手渡す萩原さん



3日目の朝は8時から紅葉の始まった琵琶湖の岸辺でメモリアルサービスがおこなわれた。アヴェマリアのバイオリン生演奏が奏でられ、私達のクラブでも丸山会長を始めみんなで黄色のバラを献花し、昨年なくなった川嶋さんを偲んだ。

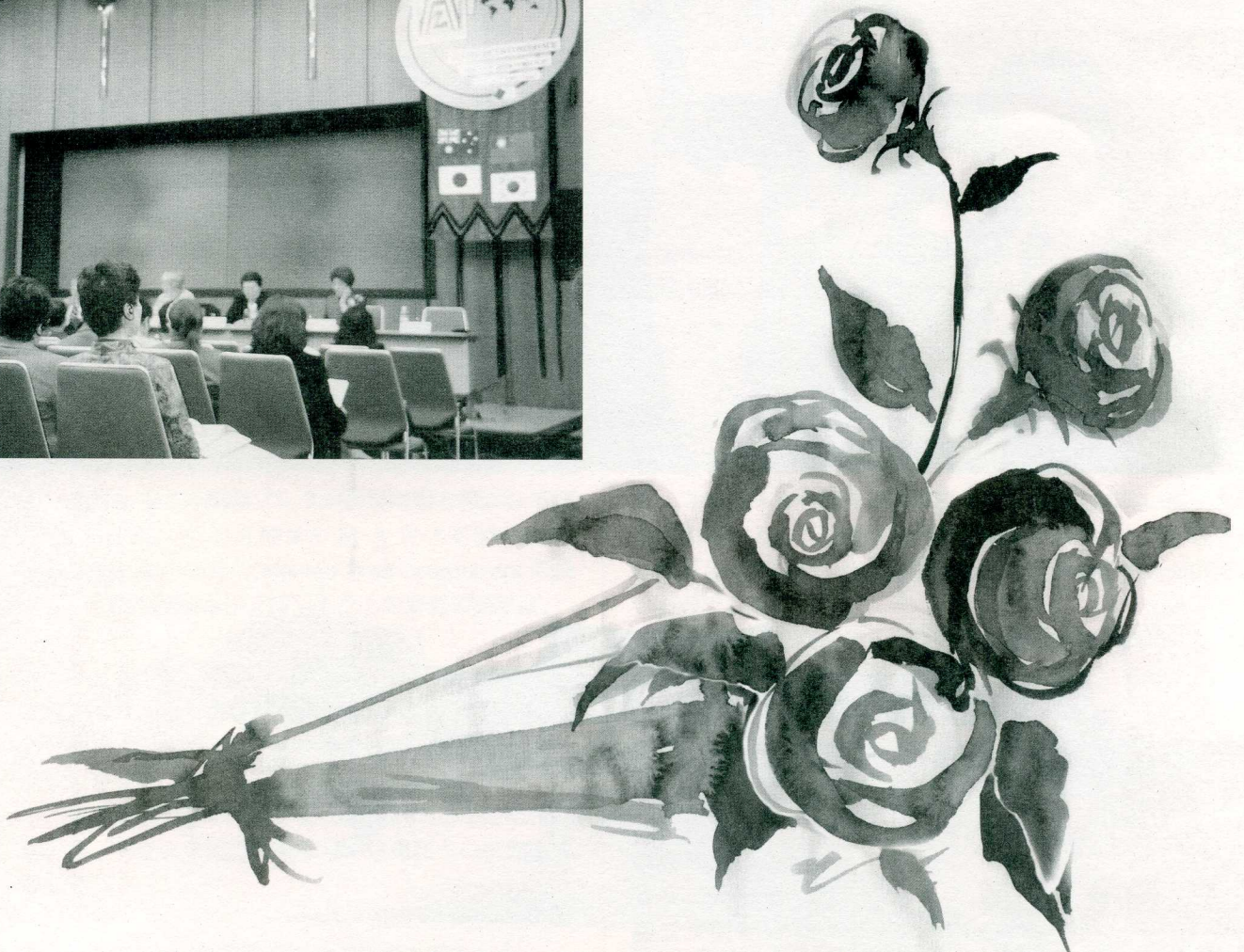
9時からのワークショップは21世紀における新生ゾントの構築と拡大～互いの知識・意見・能力を分かち合いながら～という題で4つのエリアからの4人のパネリストとゲストスピーカー、ジェイン・オブライエンさんの提案を中心におこなわれた。5人ともそれぞれユニークかつ具体的なお話で、さらにコーディネーター、上田組織拡大委員長のデーターを元にした提案もあり、実り多いワークショップであった。

たとえば例会出席率の良いクラブでは、例会にかならず卓話や講演会、勉強会など興味をもてる企画がなされている、情報開示もきちんとして行われている、など会員にとって魅力的である。お金だけでなく色々な奉仕のやり方もある、ゾントの知名度をあげ会員を増やすことが必要、会員増強では現在40人以上のクラブは40人以上がいいと考えており、20人くらいのクラブでは20人位が適当と考えているが、20人以下になると会員を増やすのは容易ではない、新会員はほとんど友人に誘われて入会しているが、半分以上の人がだれも紹介していない、皆がゾンシャンであることに誇りと魅力を持ち、少

なくとも1人の友人を増やすことが出来ればゾントはさらによくなると思うとのことだった。ジェインさんも世界にも多くの女性の組織があるが、女性の地位向上を掲げているのはゾントだけだとおっしゃっていた。

私のとくに印象に残ったのは英文法を教えておられるソウルIの副会長キムさんのお話で、ゾント会員は演劇にたとえれば舞台上がって劇を演じているようなもので、劇には主役もあれば端役もあるが、何れも必要である。そこで演じられる内容によって、さらに舞台上がりたいたい人が増えるというものだった。

10時30分からは第3回のビジネスミーティングがあった。各地区委員長の報告と選挙結果の報告で指名委員長は広島の片岡さん、私達のエリア4ディレクターは奈良の上田トクエさんが当選された。時間は矢のように過ぎて行き、12時30分きっちりに終了した。慌ただしくまたの再会を約束し、雨の中を大急ぎで4時の国際線に乗られる韓国からのお客様を京都駅ではるかにお送りし、大阪でショッピングをされる方を難波の高島屋へ案内し、榎原へ向かった。田中さん車ありがとうございました。





2001年11月3日、国際ゾンタ1692番目のクラブとして誕生した奈良万葉ゾントクラブの認証状伝達式が、橿原神宮勅使館で行われ、クラブから丸山会長、川村、宮本、牛田、幡山の5名が参列しました。

私にとって橿原神宮ははじめての地。歴史的に由緒ある地の神社で行われる認証状伝達式がどのようなものになるか期待を込めて参加させていただきました。その期待は十分になえられ、私にとって絶対に忘れられない印象深い式典となりました。先ず第1に橿原という地を強く印象づけられたこと、第2に万葉ゾントクラブの方々の細やかなそして素敵な心遣いに、です。

直前まで、26地区大会の参加者を宮本会員と一緒に京都駅や難波駅へ見送り、時間ぎりぎりに近鉄で橿原神宮前駅まで来たものの、勅使館へはどのように行くのか不安でした。改札を出ると関係者の方がお出迎え下さり、待機していたタクシーで、車が入れる勅使館の近くまで送っていただきました。あいにく雨が強く降り出し、万葉の方々のお心遣いに感謝しながら、車窓の鬱蒼とした森を見つづ会場にむかいました。

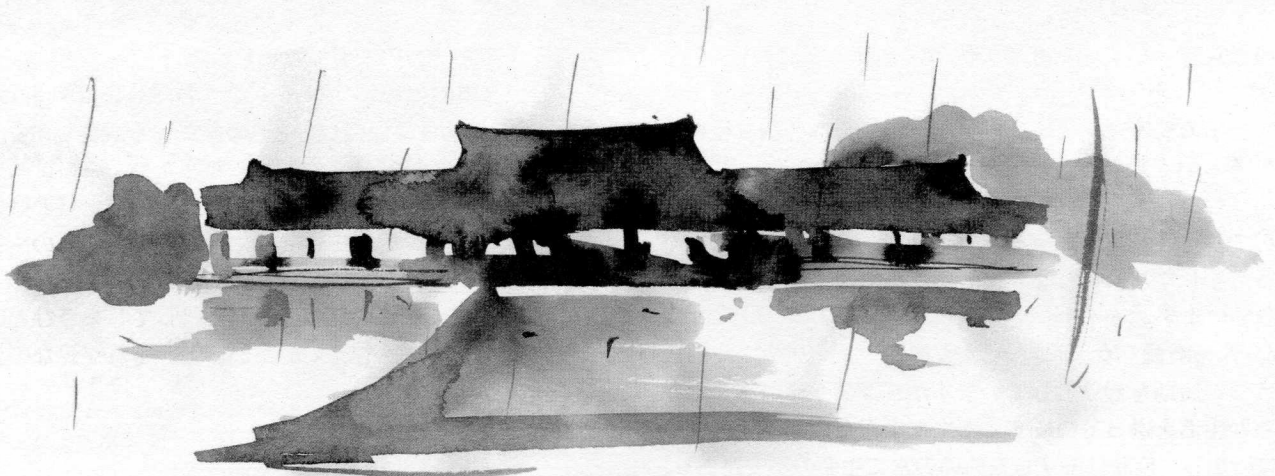
車を降り立つと道の左右には巨木が生え繁り、その間の玉

砂利の道を、竹筒の中にもしたろうそくの明かりという素敵な趣向に導かれ、勅使もかくやと厳かな気分で玄関までたどり着きました。

勅使館は、菊の形の釘隠し、鶴の彫刻を施したシャンデリア、ぼんぼり型の廊下灯と、細部にまで趣向を凝らした木造建築で、室内にいてもとても寒かったですが、凜とした寒気も、天皇のお使いを迎える館にふさわしいなと納得させられました。

式典終了後次の会場へ移動するため遠く煙雨に煙る光を頼りに歩くとき、1300年前の橿原の人々の夜、漆黒という森の夜の暗さを体感できたのも印象深いことでした。また放射状に広がる一点の光はゾンタに放たれた光明のようにも思えました。

雨の為ゾンシャングストの到着が大幅に遅れ、式典が1時間遅れで始まったことは万葉の人々にとって不幸なことでした。でも、式典のためお示し下さったお心遣いは今後の奉仕活動に生かしていただいて、きっと大きく成長して行かれるだろうと信じております。今後のご活躍をお祈りいたします。





こんにちは。このコーナーに書くのは2回目です。今回は、最近仕事を通じてふと考えさせられたことについて書きます。皆様しばしお付き合いくださいませ。

私は10年ほど前から精神科の医者をしています。大学病院、総合病院、単科の精神病院に勤めてきましたが、その間様々な患者さんに出会いました。それぞれに年齢、性別、疾患、家庭環境等全く異なる人たちですが、治療を進めてゆく中で家族の姿形というものもおのずと見えてきます。何をあたりまえの事と思われるかもしれませんが、通常我々が考えている以上に家族という人間関係の及ぼす影響は大きなものなのです。家族であればこそプラスに作用する面だけでなく、逆にマイナスに作用する面も見逃せません。そしてどのような状況であれ家族という人間関係はすぐその場で「はい、さようなら」と解消するわけにゆきませんから、治療環境として好ましくない場合その調整に苦慮するところとなるのです。

最近たまたま“母と娘”という組合せの患者さんが続いた為、その関係について考えてみようと思います。近年の世相に照らしてみても、昔のように簡単には母と娘が分離し難くなっているように思われませんか。洗濯から部屋の掃除から、もちろん食事の支度も全部お任せ。何てお気楽な母との生活でしょう。それをよしとしてしまう母の方にも多少の責められるべきはあるのでしょうか・・・。上記はあくまでも一般論ですが、いざ患者さんを取り囲む実際の家庭環境となるとこれがまた大変なのです。現在、何組かの“母と娘”の主治医をしています。初めは娘の治療でスタートするのですが、治療が進むにつれ面白い事に母の病理性もまざまざと浮かび上がってくるのです。以下に具体的な例をいくつか挙げてみます。

1) Kさん 28歳 女 両親と弟4人家族

精神分裂病の急性症状(幻覚・妄想等)も落ち着き、本人なりに一生懸命バイトを探してくるのですが、作業能力の低下、動作の緩慢さ等からすぐクビになります。さらに整理整頓が上手くできず、だらしない印象を与える生活態度となってしまう。一方母は当初よりそうした娘の病状に対し、声を裏返し息も絶え絶えに主治医にどうかしてくれと訴えていました。そのうち母も精神安定剤を希望するようになり、毎日服用しています。先日は“私、もう嫌なんです！この子の病気に付き合ってるここちまでしんどくなる。うんざり！”と娘の前で声高に叫びました。この母は、娘を受容し支持するという親としての役割を放棄してしまったのです。母にそうして投げ出された形の娘は、誰に安らぎを求めればよいのでしょうか。このような場合、多くの父親は自己の役割を担ってくれず、あてになりません。現時点で症状の再燃を危惧しています。

2) Mさん 31歳 女 両親と3人家族

躁うつ周期を繰り返していますが、家事手伝いをしながら何とか生活を送っています。たまたま母が原因不明の血液疾患に罹患し、症状は安定したものの常に生命の不安があり、

ノイローゼ状態に陥りました。そこから母と娘の終わりなき悪循環が始まったのです。互いの些細な言動に苛立ち、ののしり合い、結果娘もなかなか安定しません。先日も、家事に集中できなかった娘が風呂の水を溢れさせ床を水浸しにしたので、即刻入院させてほしいといった旨の電話が興奮した母よりありました。一晚家族で話し合ったうえで翌日の入院を勧めたところ、結局入院は中止となったのですが、この母は自らの身体疾患に対する不安からとても娘を受容できる状態にありません。娘を巻き込み、自身も巻き込まれつつ互いに悪影響を及ぼしているのです。

3) Uさん 32歳 女 母子家庭

精神分裂病とノイローゼ圏の境界例と思われ、しきりと雷などの‘音’に対する恐怖を訴えます。独りでの不安で母の後をつけて回り、結局母は自らの意思で仕事を辞め、終日家にいる事にしました。そうするとさらに依存は強化され、些事をいちいち母に確認しないと気が済まなくなり、次第にその応答に面倒になった母は激怒します。するとその母の怒りがまた新たな誘因となって、さらなる不安が生じるのです。かといってそこで母は一旦突き放す事もできず、またもや娘の求めに応じて(必要もないのに!)一緒に入院してしまったりするのです。この母は、大地のような安定した親としての態度を終始一貫してとれず、その場その場で娘に振り回されています。その結果、より一層娘の混乱を招いているという事態に気が付かないのです。

4) Tさん 37歳 女 母子家庭

境界知能ゆえか日常の些事に反応を起こし易く、もうろう状態で画鋏等の異物誤嚥、大量服薬等の問題行動を繰り返していました。その度に母はうろたえ、救急受診し、胃カメラ、胃洗浄とすっかり振り回されていました。主治医の元にも何度も入院退院を繰り返していましたが、とにかく叱責し指示するのではなく、受容し支持し本人の気付きと成長を気長に待つ事にしました。そのうち“頼りない母を混乱させてはいけない”等言い出すようになり、同時に母自身も少々の事には動じなくなり、娘の機嫌を伺うでもなく適度な距離が取れるようになりました。娘と共に成長した母がゆったり構えて対応できるようになった事が、治療よりも何よりも重要なポイントであったのかもしれません。

以上の4組の母娘について、どうお感じになりましたか。“母と娘”の関係は保護し、される関係から競合しあうものになったり、ある種友好関係に近くなったり、時には同志のごとくなったり、年月と共にその立場が逆転したりと微妙に変化してゆきます。そして最終的には家族の他のどの関係よりも特殊な深いものになるように思えるのです。

最も近くて大切なものについて邪険に接してしまうひと、そしていつまでたっても甘えていたいひと、それが母なのかもしれません。

内藤 恵子



ボランティアを始めたのは、東京女子医科大学1年生からです。東北の竜泉洞を起点にして診療、生活改善指導などの活動をしてきた無医地区研究会に入っていました。この会は地元の希望で、活動範囲が大きくなり半日で1つの地区を診療して回りました。私は、もっと土地の人たちと心の通った活動をしたかったので、2年で挫折しました。3年生からは、JIMUSA (Japan International Medical Student Association) に参加して、海外(主にドイツ)からの医学研修生のお世話をしていました。私自身は、5年生の時にデンマークの病院で交換学生として医学研修をしました。その町には、髪の高い人は私とフィリピン人の女医さん2人の3人だけでした。病院スタッフにとっても良くして頂きました。医学生のサマーキャンプではコペンハーゲン、オスロの2都市で開かれ、市長主催の歓迎会、送別会をして貰いました。イギリス、ドイツ、アメリカ、オランダ、カナダ、デンマーク、スウェーデン、中国、日本、ハイチの医学生が集まりました。30年前、北欧は福祉の先進国でした。老人ホームも見てきましたが、今、やっと日本も追いついてきたようです。

卒業後は、一人前の医師になろうと専念し、息子が小学校入学を期に関西医科大学第2病理学教室の研修生になり学位を頂きました。息子も、研修医を終えたので、これから、自分のやりたい奉仕活動などに参加していくつもりです。

今年のゴールデンウィークには、ネパールの子供を育てる会主催の無料診療事業に参加しました。亜熱帯ジャングルでネパール人医師8人、日本人医師3人、薬剤師1人、看護婦1人、通訳3人、ボランティア20人で2日で2000人診察しました。私は眼科で300人診察し、政情が安定すれば来年も行く準備をしています。この団体はネパールの孤児院を支援し、女の子にはセーターを編む技術、男の子には車の整備技術を教えて自立の道をつけています。その他、職業訓練所、公設トイレを作ったりしています。きれいな目をした子供たちを見ていると心が洗われるようです。ZONTAのことはなにも分かりません。皆様、宜しくご指導ください。



2001年12月 Xmas会

編集後記

12月2日大津ゾントクラブのチャリティークリスマスパーティに丸山会長と一緒に参加しました。なつかしい琵琶湖ホテルは湖畔の木々が少しかわり、ハゼやモミジが真赤に色づいていましたが、しずかな湖のようすはほとんど変わっていませんでした。あれからまだ1ヶ月しかたっていないのが、信じられない気持ちでした。

ゾンタにもこの1ヶ月の間に色々なことがありました。まだ解決できていない困難な問題もたくさんあります。でもお迎えにいった車中での韓国ゾンジャンの明るい笑顔、会場での台湾ゾンシ

ャンとのうれしい再会、日本ゾンジャンとの友情と団結を大切に、前向きに進みたいとおもいます。

If we hold on together……I know our dreams will never die !
地区大会の湖上ミシガンで奏でられた大好きなこの曲。この曲のように。

お忙しい中貴重な原稿をお届け下さった皆さまに感謝いたします。広石さん急なお願ひ、ありがとうございました。2002年が平和でありますように。

広報委員長 宮本典子